

英米文化学会会報

第 81 号

平成 21 年 10 月 15 日



標高 2,300m。北米大陸の分水嶺、ワイオミング州サウスパス。西へと続くオレゴン・トレイルには茫漠たる荒野がひろがっている。1861 年、マーク・トウェインは駅馬車で、この峠を通過して西を目指した。はるか上空を飛ぶ旅客機は、知らぬ顔で、飛行機雲を残して過ぎていく。(撮影：佐野、2006 年 秋)

目次

- ◆ 例会担当より 英米文化学会第 130 回例会のお知らせ
- ◆ 学術担当より 紀要『英米文化』第 40 号論文締切り迫る
- ◆ 財務担当より お知らせ
- ◆ 事務局より 会員消息

◆英米文化学会 第 130 回例会のお知らせ (例会担当理事: 小林弘)

日時：平成 21 年 11 月 14 日(土)午後 3 時 00 分～6 時 10 分

午後 2 時 30 分受付開始

場所：日本大学歯学部 4 号館 三階 第 3 講堂 <地図と交通は 4 ページに掲載>

(JR 御茶ノ水、営団千代田線新御茶ノ水、都営新宿線小川町 他 下車)

懇親会：日大歯学部 3 号館 地下ラウンジ、例会会場の斜め向かいの建物

会費：2,000 円 午後 6 時 30 分～8 時 30 分

懇親会は学会の忘年会を兼ねていますので懇親会のみでの参加も歓迎いたします。

開会挨拶

英米文化学会会長

小野 昌 (城西大学)

(3:00—3:10)

研究発表

1. Topics: Making Students More Aware of the Outside World

(3:10—3:50)

発表 Wayne, E. Parton (千葉大学)

司会 田嶋倫雄 (日本大学)

2. 『緋文字』におけるロジャー・チリングワースの役割

—復讐が生んだ逆効果から読み解く—

(3:50—4:30)

発表 笠原慎一郎 (昭和女子大学大学院博士課程修了)

司会 河内裕二 (明星大学)

————— 小休止(4:30—4:40) —————

3. グランヴィル・バーカーの「あるべき演劇」についての考察

(4:40—5:20)

発表 藤岡阿由未 (明治大学)

司会 門野 泉 (清泉女子大学)

4. 外国語としての英語における言語情報の図的呈示効果

(5:20—6:00)

発表 鈴木明夫 (東洋大学)

栗津俊二 (実践女子大学)

司会 小山義徳 (聖学院大学)

閉会挨拶

英米文化学会理事長

石川郁二 (法政大学)

(6:00—6:10)

研究発表抄録

1. Topics: Making Students More Aware of the Outside World

Wayne E. Parton (千葉大学)

In classrooms sometimes it seems teaching is strictly limited by our textbooks and syllabi, and lectures become monotone and a bit tedious for students. During such moments, referring briefly to interesting current topics not only enlivens classroom atmosphere but also encourages more awareness and interest in the world outside their lives on campus. For

example, H1N1, the swine flu virus, has been declared by the foremost authorities in the world to be a worldwide pandemic. What does this mean? Will it rival the 1918 Spanish Flu virus? Even a single clear and concise comment can open students' eyes to new foreign matters. In this presentation we examine, with specific instances:

- 1) How to select interesting and important current topics for classrooms
- 2) How to make students aware of these topics with a fresh, new perspective

2. 『緋文字』におけるロジャー・チリングワースの役割

—復讐が生んだ逆効果から読み解く—

笠原慎一郎（昭和女子大学大学院博士課程修了）

ナサニエル・ホーソーン『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) に登場するチリングワースを考察する。チリングワースは復讐のために人の心を覗き込むという行為をした。人の心を覗き込むという行為はホーソーンが最も嫌った行為であった。チリングワースの復讐はアーサー・ディムズデルの心を蝕む。しかし、最終的にはそれがディムズデルに罪と向き合う覚悟をさせるきっかけとなり、心の平安へと導いていく。そのような観点から論を進める。ディムズデルが罪と向き合えなければヘスター・プリンも罪とは向き合えない。そうなればパールも幸せにはなれない。チリングワースが復讐の目的であったことが、ディムズデルを良い方向に導き、そのことがヘスターやパールにも良い影響となって伝わっていく。その過程を分析することによってホーソーンがどのような役割をチリングワースに与えていたのかを考察する。

3. グランヴィル・バーカーの「あるべき演劇」についての考察

藤岡阿由未（明治大学）

20世紀の英国演劇史を、そのはじまりに寄与したハーリー・グランヴィル・バーカーの存在抜きに語ることは難しい。バーカーは、第一次大戦まで俳優、劇作家、演出家として活動し、現場引退後は演劇研究に専心して後続の演劇人に多大な示唆を与えた人物である。だが、近代劇、ギリシャ劇、シェイクスピア劇など幅広く上演し、近代演劇運動、国立劇場運動、そして政治運動にも関わったという彼の経歴の多彩さは、「折衷主義者」との評価と表裏の関係にあったと言わざるを得ない。そこで本発表では、特にバーカーの政治活動と演劇活動との関係に焦点をあて、彼の理想の一貫性を探る。まずは、バーカーが牽引した近代演劇運動における政治性を明らかにしたうえで、近代演劇運動から彼が抽出したものを探り、それが演劇理想を綴った著書『あるべき演劇』（1922年刊行）にどのように結実していくかを考察する。

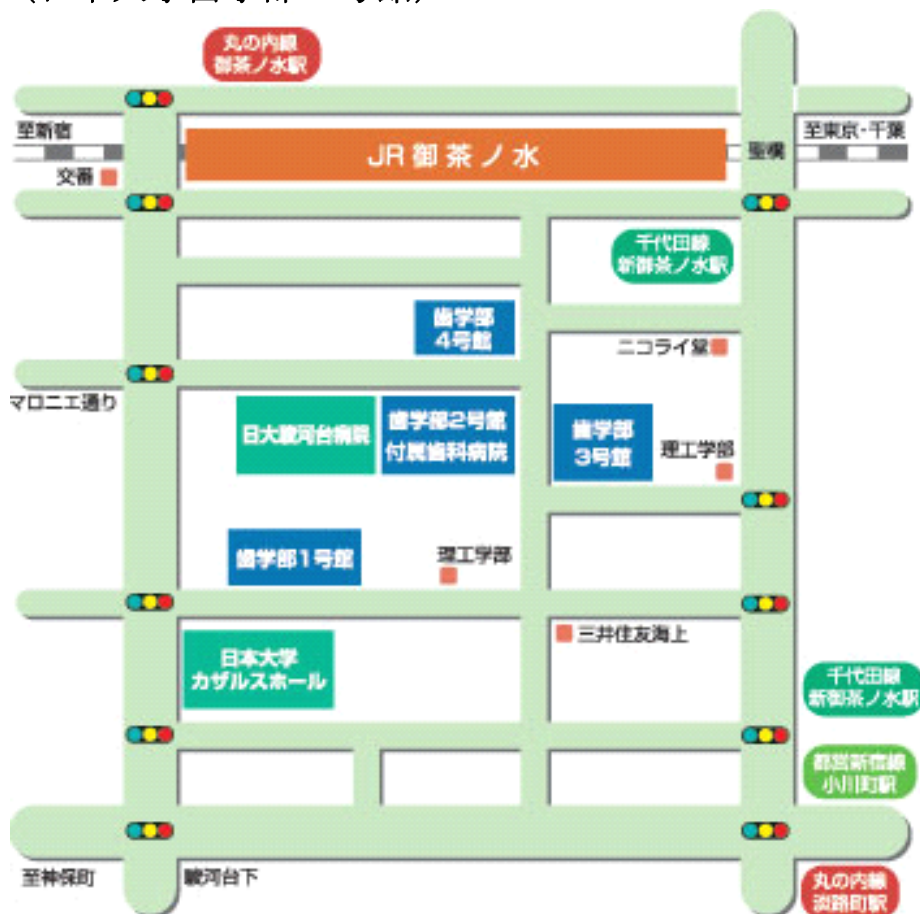
4. 外国語としての英語における言語情報の図的呈示効果

鈴木明夫（東洋大学）

栗津俊二（実践女子大学）

等位接続詞で結ばれる情報の理解が、図的呈示によって促進されるか、その促進効果は Larkin & Simon(1987)が提唱する探索的効率性に起因するのか、という課題を2つの実験により検証した。実験1では、線状的に呈示した等位接続詞を含む英文と図的に呈示した英文を読む群について、英文の理解度を比較した。結果は図的に呈示した群が線状的に呈示した群より優れていた。実験2では実験1と同じ課題を用い、線状的呈示と図的呈示、それぞれ短時間と長時間呈示する4群について、英文の理解度を比較した。結果は長時間提示の場合は線状的提示と図的提示の両条件でも成績に有意な差は生じないが、短時間呈示の場合には図的に呈示する群が線状的に呈示する群より優れていた。さらに学習者はある教示文に従えば、もともと線状的に呈示された等位接続詞を含む英文を図的に変換することが可能であるのか調査した。特定の教示文に従えば学習者は容易に図的に変換できることが判明した。

* 例会会場（日本大学歯学部 4号館）



JR・地下鉄： JR 中央線・総武線 御茶ノ水駅
都営地下鉄 新宿線 小川町駅 営団地下鉄 千代田線 新御茶ノ水駅
営団地下鉄 丸ノ内線 御茶ノ水駅 営団地下鉄 丸ノ内線 淡路町駅

◆紀要『英米文化』第40号論文締切り迫る

(学術担当理事：上野和子)

当学会の紀要『英米文化』第40号の原稿締切りは10月末日です。

投稿原稿は、担当の上野和子(〒154-0017 東京都世田谷区世田谷3-22-21)までお送りください。

紀要『英米文化』投稿規程

<投稿規程>

1. 本誌は、英米文化学会の機関誌であり、原則として一年に一回発行する。
2. 投稿原稿は、英語文化における文学、文化、語学、英語教育などの論文とし、未発表のものに限る。ただし、学会で口頭発表したものについてはその限りではない。その旨を明記した注を、表紙1頁に入れること
3. 投稿資格 本学会員とし、投稿する当該年度までの会費を完納している者に限る。
4. 応募締め切り 毎年10月末日までに、原稿3部と、記録媒体に入れたファイルならびに略歴(所属学校・機関、研究分野、主要研究テーマ)を学術担当までに送付すること。
5. 原稿掲載の可否 学術委員会による査読を経て決定する。
6. 編集、校正は、編集・学術委員会にて行なう。執筆者校正は二校までとする。初校は一週以内、再校は3日以内に返送すること。期限を過ぎても返送されない場合に、学術委員会は掲載を断る権利を有する。
7. 上記以外の案件については、理事会の判断が優先される。

<執筆要項>

1. 長さ・形式 和文論文は12,000から16,000字数の間にまとめる。A4用紙に38字×25行、フォント12で打ち出す。英文論文も4,000から5,000語数を目安とし、A4用紙に75字×25行とする。
2. 和文論文には、英文表題をつけること。応募論文は、論文の筆署名、所属名(非常勤の場合は(非)、大学院生の場合は(院)と付記)、論文題名、口頭発表に関する注記、謝辞などは表紙にのみ記載し、論文第一ページ以降は題名と本文のみとする。なお、日本名のローマ字表記は原則として姓名の順にする。例 山田太郎 YAMADA Taro
3. 英文・和文の論文は共に、200語程度の英文のAbstractをつける。英文論文については、専門職によるネイティブ・チェックを受けた後に投稿すること。
4. 本文への注釈
 - a) 注は本文の記述順にアラビア数字を附し、後注とする。
 - b) 外国の人名、書名などは、初出の箇所日本語の後にマル括弧付で、綴りを併記する。書式の細部に関しては、『MLA新英語論文の手引き』(北星堂)の最新版に遵うものとする。
5. 提出する原稿には、CD、DVD、フロッピーなどいずれかを添付する。
6. 執筆者負担金は『英米文化』出版後、財務委員会で負担額を算定し、執筆者に通知する。執筆者には、掲載誌5部と抜き刷り50部を進呈する。負担金は一頁につき2000円である。

以上

◆財務より お知らせ

(財務担当理事 :山根正弘)

今年度分の年会費納入がお済みでない方は、お早めに郵便振替にてお振込み下さいますようお願い致します。

なお、振替用紙は5月の会報に同封いたしましたが、ゆうちょ銀行・郵便局に備え付けの振込取扱票もご利用できます。

年会費 : 5, 000円

口座番号 : 00160-7-611777

加入者名 : 英米文化学会

納入状況の問い合わせ : 山根正弘 MasahiroYamane(at)SES-online.jp

<おことわり>

メールアドレスの表記については、@入りのメールアドレスを検索・流用して迷惑メールを送りつける悪質な業者が、昨今、多いようですので、「@」を「(at)」に置き換えて表記させていただいております。メール作成のときには、お手数とは存じますが(at)を@に置き換えてご送信いただきたくお願いいたします。

◆事務局より 会員消息

(事務局担当理事 : 大東俊一)

省略

英米文化学会会報 第81号 編集/発行 : 英米文化学会 編集責任者 : 佐野潤一郎
〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 5-27-23

英米文化学会事務局 〒339-8539 さいたま市岩槻区馬込 1288 人間総合科学大学人間科学部 大東俊一研究室内

Tel:048-749-6111(office), 03-5399-3395(home) E-mail:ShunichiDaito(at)SES-online.jp

年会費等振込先 : 郵便振替 加入者名 英米文化学会 口座番号 00160-7-611777

学会ホームページ <http://www.SES-online.jp/indexj.html>